

「なんとなく」から はじまっても

薬学部
薬学科

講師 近藤 朋子



「生物(いきもの)」が好きだから、生物系がいいかな。私が大学へ進学するにあたって学部を選んだ理由はこんな感じでした。そんな理由から長い学生生活が始まりました。

大学に入ったらクラブへ、と考えた時に高校にはないクラブで弾いてみたかった「マンドリン」が弾けるということで「アウロラ」に入りました。あまり練習熱心ではありませんでしたが、2年生になり函館キャンパスへ行ってか



学部の卒業式。講座のみんなと(前列左端が私)

邂逅

—人生の原点を築く

看護福祉学部
臨床福祉学科

教授 志水 幸



私が学部・大学院時代を過ごしたのは、1980年代である。振り返ってみれば、80年代は、後半のバブル経済に象徴される社会・経済・文化の一つの転換期とも言える時代であった。学問の世界、とりわけ人文・社会科学領域では、構造主義を淵源とする「ニュー・アカデミズム(以下、ニューアカ)」が興隆してきた時代である。1983年、弱冠26歳で京大研究所助手に就任した浅田彰が、院生時代に書き溜めた原稿を刊行した『構造と力』は、15万部を売り上げる大ベストセラーになった。ニューアカは、学際的、あるいは特定の学問領域を超えた思考・研究、つまり“越境する知”にもとづく現代思

らも週末は札幌へ来て練習して演奏会にでるくらいクラブ活動を堪能しました。

4年になり講座を決めるにあたって、やはり生物の中でも魚を扱えて興味があった生殖の研究をしている淡水学講座を選びました。淡水学講座はウナギやサケを材料として研究を行っていた教室で、実験材料

が余ったりすると(もちろん何もしていないのですが)みんなで料理をして食べることもあり、ウナギのかば焼きを器用に作る先輩たちに驚いた覚えがあります。個性の強い先輩たちに少々驚きながらも先輩たちの真剣に実験をする姿を見て、自分もこういう風に研究をできるようになりたいと思うようになり、修士に進むことになりました。修士からは同じ生殖の研究ができる理学部の生体情報分子学講座に入り、6年間の研究生活が始まりました。理学部では実験材料が熱帯魚になり、毎日20個以上の水槽の水替えをしながら、卵成熟過程についての研究をしてい



修士2年時。研究室での慰霊祭(中央が私)

ました。毎朝「今日も魚たちは元気かな?」と水槽をのぞいてから、何時間も顕微鏡を覗いていた日々がとても懐かしいです。研究ばかりの日々かというそうではなく、博士課程になると、教養1年時の学生実習を担当することになり、「教えること」の楽しさと難しさを知ることとなりました。また、バイト代を貯めて休みをもらっては海外旅行に行くというあまり大学院生らしくないこともしていました。このような私を根気強く指導してくださった理学部の山下正兼教授には本当に感謝しています。学生実習はその後8年も続けることとなり、これがのちの職業につながることになりました。「なんとなく」で始まった学生生活ですが、このときのさまざまな経験や、人との出会いのおかげで現在の私があるような気がします。

私の 学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。

今回は近藤講師と志水教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

想の展開であった。この思想は、やがて「ポスト・モダニズム」と呼ばれるようになる。その潮流は、私が専攻する社会福祉学分野でも、90年代以降に移殖され現在も命脈を保っているかに見える。

翻って、当時の私はどうだったのか?これは一つの学問上の立場表明になるのだが、なぜかニューアカの“ゆらぎの思考法”には違和感をおぼえた。私が求めたものは、より厳格な、より(歴史性を踏まえた)正統な、いわば“伝統的思考法”であった。学生時代の財産を“邂逅”として焦点化するならば、すなわち良き師・良き友・良き書との出会いであろう。私の先生は、時流に翻弄されない透徹した知性と感性を兼ね備えられた方であった。また、その師のもとで薫陶を受けた学友は、先輩・後輩ともに爽やかな品格に恵まれた人々であった。さらに、良書

である。87年に刊行された村上春樹の『ノルウェイの森』で、主人公がグレート・ギャツビーを読んでいる場面で、先輩の(死後30年を経ていない作家の本は原則として手にしない)永沢から、「時の洗礼を受けてないものを読んで貴重な時間を無駄にしたくないんだ。人生は短い」(上巻66頁)と言われる件がある。最新の作品に触れることも大切なことであるが、古典的名著に親しみ温故知新の感性を鍛えることも必要であると思う。

さて、自らの学生時代を振り返り、何を学生たちに伝えるべきであろうか。誤解を恐れずに言えば、人間や社会に対する基本的な認識枠組みや態度は、十代後半から二十代前半の多感な時代の中でしか育まらない。学生時代とは、いわば自身の人生の原点(核)を築くための大切な時間である。私の場合は、基本となる型を求めた。型は模倣によってのみ会得される。何を模倣すべきか、自らを薫風の中におくように心がけることが肝要である。